様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２４０１

研究課題名（和文）認知症の同意・判断能力の簡易判定法の確立

研究課題名（英文）Investigation of simple method for consent/judgment ability of dementia

研究代表者
谷向　知（Tanimukai, Satoshi）

愛媛大学・医学系研究科・教授

研究者番号：９０３６１３３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：認知症の人の意思決定のための判断力を検討するために事例を作成した。この事例は、自分に起きている事象を、他人におきていると想定した時に判断が異なると設定したものである。この事例を用いることで専門職において認知症の人の判断力の判定に変化がみられた。
認知症の人の意思決定支援においては、本人の気持ちを最優先に考えることにかわりないが、専門職の多くが今回の事例のように客観性を持たして判断を行うことも大切であると考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
認知症の人の意思決定において、本人の意思に基づいて行う旨記載されているが、認知症の人意思の確認が困難であることが少なくなくない。また、医療同意においては、状況を理解したうえで医療的介入を拒んでいるのか、認知機能によるものなのかの判断は容易ではない。今回、自分に起きている主観的状況ではなく、第三者に起こった客観的な出来事として判断を促す方法について検討した。
これまで、このよに認知症本人の判断力について検討されたものはなく、認知症の人の理解を深めていく視点を提案できたことは、社会的に意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：A case study was created to examine judgments for decision-making in people with dementia. In this case study, it is set that the judgment is different when it is assumed that the event that is happening to oneself is happening to another person. By using the case study, changes in the judgment of the judgment of people with dementia were observed among professionals. In decision-making support for people with dementia, the person's feelings are given top priority, but many professionals think that it is important to make judgments with objectivity, as in the case study.

研究分野：老年精神医学

キーワード：認知症　判断力　意思決定　第三者的視点

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

超高齢者社会をむかえている我国において、団塊の世代が後期高齢者をむかえる 2025 年には認知症尾高齢者が 700 万人達すると推計されており、様々な形で社会問題となっている。認知症の人の生活の質を左右する課題として、介護保険契約や住まいの選択（渡邉,2007)、治療の選択（成本,2013）など様々な場面での意思確認の困難さが報告されている。これまで様々な形で意思決定困難者の支援に向けたガイドラインが作成されており、その内容はいずれのガイドラインにおいても、本人への支援は、本人の意思（自己決定）の尊重に基づいて行う旨が基本的な考え方として揚げられている。しかし、認知症高齢者においては本人意思の確認が困難であることが少なくなくない。また、ガイドラインには意思決定支援のためのプロセスや事例に基づく支援のポイントが記載されてはいるが、本人の意思決定（判断）能力をどのように評価すればよいかについて具体的に示されてはいない。

また、認知症という病名があると、何か些細なミスがあると判断力を欠く人としてレッテルを貼られ、本人に残存する判断力を見過ごされてしまっているという現実がある。しかし、例えばもの取られ妄想で強く嫁を責めるアルツハイマー型認知症の人に、「自分でどこかにしまったものが見つけられずに、『嫁がとった」という知り合いの人がいるけど、その人のことどう思う？」と尋ねると、ほとんどの場合「それはひどい人だね！」という言葉が返ってくる。つまり、事象そのものに対する判断能力は低下していないように考えられる。しかし、実際の生活場面や臨床場面において、本人の評価はあくまで、ひとつひとつの認知症本人の応答（反応）によるものに限られている。

２．研究の目的

認知症の人の支援に携わる専門職をはじめ、多くの人が認知症の人に備わる判断能力に気づくための、簡便な評価方法として、認知症に人に起こった事象を、自分のこととしてではなく、別の人におこった事象として尋ねる（以下、第三者的視点）を提案。その回答によって、認知症の同意や意思決定に影響を及ぼす可能性について検討する。

３．研究の方法

（１）認知症の介護、医療現場で携わる専門職が認知症の人の評価をどのように行っているかについて調査を行う。

（２）第三者的視点に関する架空事象についての事例の設問の作成を行う。

（３）作成した設問をもちいて、専門職（福祉職、医療職）をについて、調査を行う。

４．研究成果

（１）認知症看護認定看護師（DCN）と福祉職が判断力を考える根拠

DCN66 名と福祉職 49 名を対象に､に認知症の人の判断力の有無を判断している基準について、最重視と重視しているもの（複数回答）について回答を得た。

DCN、福祉職ともに「本人とのやり取り」を重視し、ついで「家族」､「医療」からの情報をもとに判断していることが明らかになった。ただ、職種間でみれば、DCN は 88%が直接的な「本人とのやり取り」を最重視しているのに対し、福祉職では 65%が間接的な「家族」や「医療」からの情報を最重視していた（図 1）

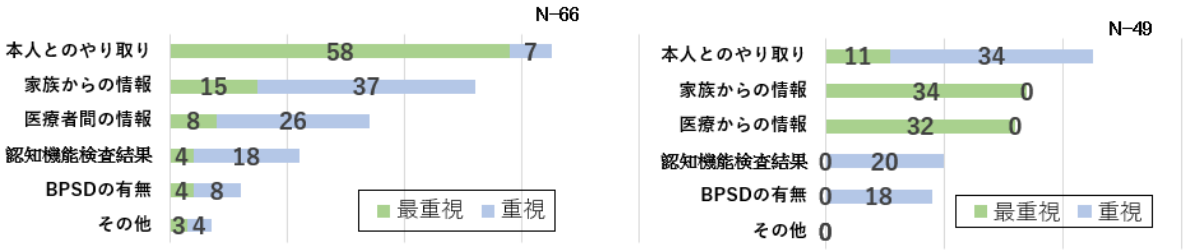

図１　認知症の人の判断力を考える根拠　（左：DCN、右：福祉職）

同じ、DCN と福祉職を対象に場所の見当識障害の有無について、「認知機能検査で病院と回答できない」場合（設問１)、「同じ人が院内であなたのことを看護師さんと声をかけた場合」（設問 2）を尋ねた。設問 1 で場所の見当識障は「なし」との回答が DCN で 55%、福祉職では 45%であった。しかし、設問 2 の回答を見ると、設問 1 で 見当識が「ない」と回答した DCN の 75%、福祉職の 69%で見当識は「あり」（保たれている）と変化がみられた（図 2)。

図 2　検査と生活場面での見当識障害への判定の変化　（左：DCN、右：福祉職）

（2）もの取られ妄想を例に、第三者的視点を加えた判断力について、同じ DCN、福祉職を対象に以下の設問をおこなった。

「激しい妄想のある B さんに、『私の知り合いのおばあさんが、自分で財布をしまっておいて、それが見つけられず、『あんた盗ったやろう』と嫁のせいにして、お嫁さんはじめみんな困っておられます。そんなおばあちゃんどう思う？』と尋ねると、B さんは即座に『それはひどいおばあちゃんやね！』といわれました。　B さんには判断力がありますか？

DCN も福祉職のいずれにおいても、8 割以上で B さんには判断力があると回答した（図 3）。

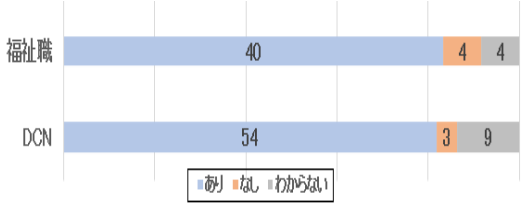

図 3　第三者視点を加えた設問による判断力の判定

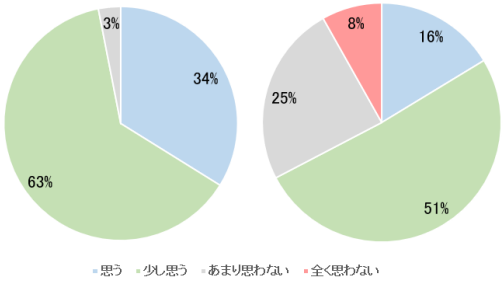

図 4　第三者視点を加味した判断力の判定について　（左：DCN、右：福祉職）

架空設問ではあるが、第三者的視点を認知症の人の判断力の有無について変化がみられると考えられる結果であった。

ついで、判断力の有無を考えるにあたって、第三者的視点で認知症の判定を考えてみたいと思うか否かを尋ねたところ、DCN、福祉職の半数以上で、肯定的な回答がみられ、このような考えは、福祉職に比べ、DCN でより顕著にみられ、否定的な考えは 3%にしか見られなかった（図 4）。

（3）右記状況を設定した場合に、医療同意について誰の意向を尊重するのか。また治療についての判断力の有無について、医療職 69 人、福祉職 37 人、認知症について一通りの講義は終了しているが認知症の人とかかわることのない学生 57 人を対象に検討した。

Cさん（74歳、男性）は中等度の認知症。
トイレの場所がわからず迷うことがあるが、便/尿意はあり、家人やスタッフを呼んでトイレで排泄することはできる。
最近、排便の訴えが増え、腹痛や腹部膨満強く、体重減少がみられるため受診したところ、大腸がんが発見された。
手術適応ありということで、何度か本人、家族を交えて治療方針について話あっており、家族は手術を希望するが、Cさんは手術はおろか、「もう十分生きた。何もせんでいい」といい化学療法にも難色を示している。
後日、Cさんに看護師が、「お腹が痛くて病院で診てもらったら大腸がんが見つかった人がいて。その人手術を受けたら、ご飯も食べられて元気になるのに、まったく治療を受けようとしないの。どうしたらいいと思う？」と尋ねたところ、Cさんは、『手術なんかこわがらんで受けりゃいいのに』と答えた。

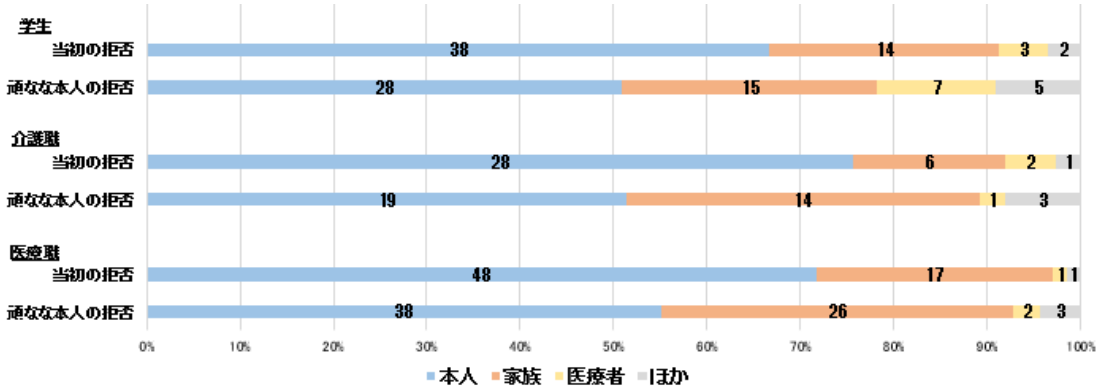

図 5　架空状況における医療判断

治療を拒む C さんが、第三者的視点では治療に肯定的な返事をしていることもあってか、C さん本人の意向を最重視しようという回答が 7 割前後であり、次いで家族の意向であった。しかし、C さんが頑なに治療をし続けた場合には、家族の意向が増多し、C さんの意向を最重視しようという割合は 5 割まで減少し、この傾向は、職種間、認知症の人とのかかわりの頻度とは関係がなかった（図 5）。

医療同意における判断を検討する際には、何を重視して判断能力を検討するかの問いを、先の医療職、福祉職に行ったところ、最も重視されるのは本人の「気持ち」が医療職 49%、福祉職 60%で、「理解力」の 2 割をはるかにしのぐ結果であった。興味深いものとして、医療職 13%、福祉職の 9%で「関係性」が重視されていた。本研究で投げかけた、第三者的視点については、医療職のみで 3%にとどまった（図 6）。

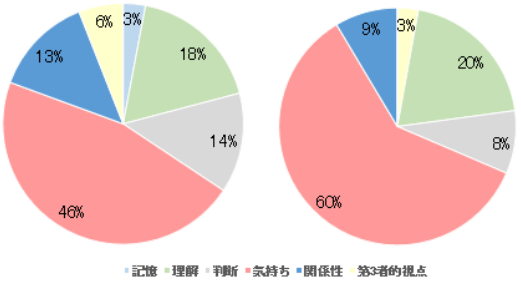

図 6　意思決定の現場で重視されるもの

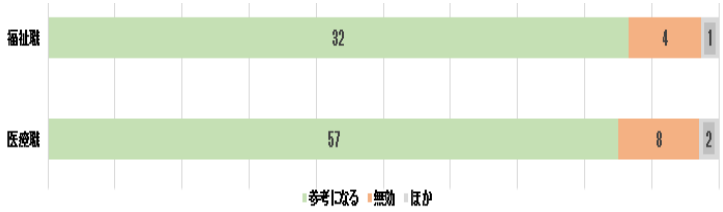

図 7　第三者的事象として伝えて判断する有用性

ただ、医療職、福祉職いずれにおいても、認知症の支援において対象者の判断力を考えるにあたって、85%で本人に起こった事象を、第三者的な情報提供の仕方によってなされた判断も有用になるとの回答が得られた（図 7）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Shiba T, Yamakawa M, Endo Y, Konno R, Tanimukai S	４．巻 22
２．論文標題 Experience of families of peaple living with frontotemporal dementia : a qulitative systematic review	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Psychogeriatrics	６．最初と最後の頁 530-543
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12837	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷向 知	４．巻 540
２．論文標題 認知症ケア　再考　～大切なことは？～	５．発行年 2020年
３．雑誌名 看護のチカラ	６．最初と最後の頁 106-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷向知、井上真喜子、河本圭仁	４．巻 60
２．論文標題 施設から地域へ！－ 施設入居の認知症高齢者とともに地域をつくる－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Geriatric Medicine（老年医学）	６．最初と最後の頁 603-607
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小森憲治郎，柴　珠実，谷向　知	４．巻 17
２．論文標題 原発性進行性失語のケア	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本認知症ケア学会誌	６．最初と最後の頁 546-553
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷向 知、樫林哲雄、園田亜紀、福原竜治、小森憲治郎、石川智久	4．巻 28
2．論文標題 著明な前頭葉症状がみられる一方、他者への配慮がみられた一例	5．発行年 2017年
3．雑誌名 老年精神医学雑誌	6．最初と最後の頁 637-640
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷向 知、柴 珠実	4．巻 37
2．論文標題 ピック病と意味性認知症	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Nursing	6．最初と最後の頁 122-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　8件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 谷向 知
2．発表標題 若年性認知症の支援を通しての課題と展望
3．学会等名 第41回日本認知症学会学術集会／第39回日本老年精神医学会　合同学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 谷向　知
2．発表標題 認知症疾患医療センターの機能と地域連携、そしてこれから
3．学会等名 Regional IPA/JPS Meeting・第36回日本老年精神医学会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 若年性認知症におもう～診療、調査、活動をとおして～
３．学会等名 令和3年度　若年性認知症支援コーディネーターフォローアップ研修（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 認知症と共に生きる社会「若年性認知症」～診療・地域活動から思うこと～
３．学会等名 令和3年度徳島県認知症対策普及・啓発事業講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 認知症の人以外の精神疾患と認知症ケア
３．学会等名 日本認知症ケア学会　第81回教育講演（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 認知症の人の声、届いていますか - これから目指す共生社会 -
３．学会等名 令和3年度愛媛県認知症施策市町連携会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 「本人が大切にしたい暮らし」を 後押しする地域社会　～認知症の人の社会参加を考える～
３．学会等名 令和２年度厚生労働省 老人保健健康増進等事業　報告会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 認知症と共に「いま」を生きる　～診療の現場から～
３．学会等名 観音寺市 専門職のためのオンラインセミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 若年性認知症の有病率とその背景
３．学会等名 四国厚生支局 令和2年度認知症セミナー
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 前頭側頭葉変性症の診療におけるピットフォール
３．学会等名 第６１回日本神経学会学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 奥村由美子、谷向 知、久世淳子
２．発表標題 認知症介護にかかわる家族の自己認識と精神的健康 の関連
３．学会等名 日本老年社会科学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 前頭側頭型認知症の関わりを通して認知症ケアの醍醐味を知る
３．学会等名 日本認知症ケア学会　東海地域部会Ｉ（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 認知症ケア再々考
３．学会等名 全国老人福祉施設研究会議（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷向 知
２．発表標題 高齢者に対する意思決定支援の実際
３．学会等名 松山赤十字病院「病院と在宅看護・介護の連携」合同研修会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷向　知
２．発表標題 意味性認知症の診断とその後のケア
３．学会等名 日本老年精神医学会　第25回生涯教育講座
４．発表年 2018年

１．発表者名 谷向　知
２．発表標題 前頭側頭型認知症の関わりを通して認知症ケアの醍醐味を知る
３．学会等名 日本認知症ケア学会　東海地域部会
４．発表年 2018年

１．発表者名 柴 珠美、谷向 知
２．発表標題 前頭側頭葉変性症のケア
３．学会等名 第18回日本認知症ケア学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 谷向 知、柴 珠実	４．発行年 2019年
２．出版社 学研メディカル秀潤社	５．総ページ数 200
３．書名 ナースが知っておく　認知症 ” これだけ"ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	柴　珠実 (Shiba Tamami) (60382397)	愛媛大学・医学系研究科・講師 (16301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関